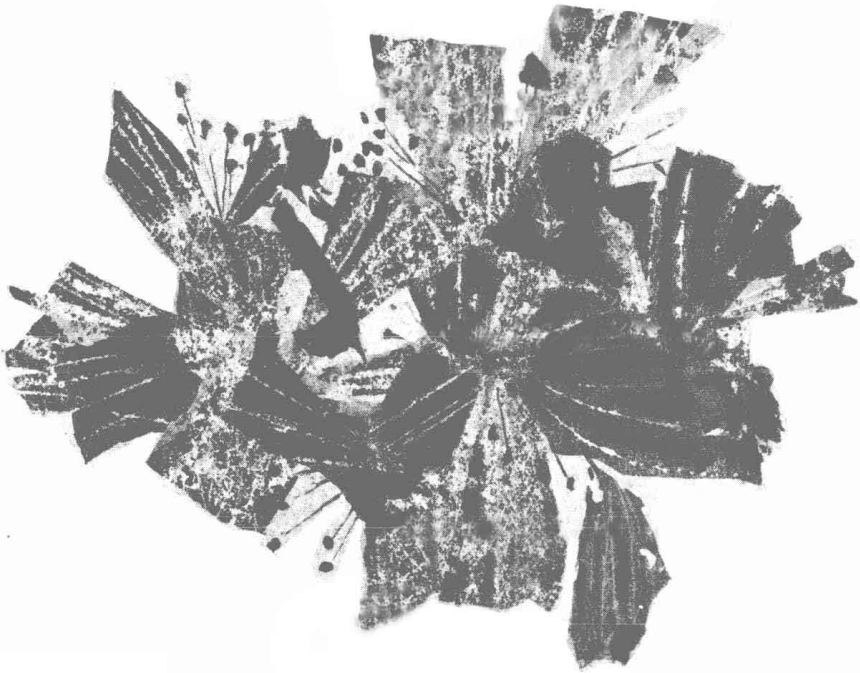
佐多稲子



講談社版

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

女たち

定価　四八〇円

昭和四〇年一〇月二〇日発行

著者　佐多稲子

発行者　野間省一

発行所　株式会社講談社

東京都文京区音羽町三ノ一九

電話　東京（九四二）一一一一

振替　東京三九三〇

印刷所　豊国印刷株式会社

製本所　有限会社大光堂

© 佐多稲子　昭和四〇年　Printed in Japan

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

女たち

目次

蝶々 9
疵あと 31
女人高野 47
かたち 77
母子抒情 95
結婚式 117

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

立ちおくれ　139
冬日　161
石楠花　183
お与津　205
女たち　229

装幀　堀　文子

佐多稲子作品集

女たち

蝶

々

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

1

私はこの頃になってまた、しばしばその人のことを思い出す。五年前の、その人に逢ったときから心に残る人ではあったが、その後の五年間は、私にはあたふたと過ぎてしまって、今ではその人の名前も覚えていない。あたふたと過ごしていると、五年前のことは、ものごとによってつい昨年のようにおもえたり、遠い過去のようになっていたりする。この人のことは、ああ五年前だったか、とその東北地方の小さな町に私が仕事を持って、数日滞在していたということで数えられるが、そうわかっても、もっと以前のようにおもえたりもする。しかし、それにしてもなぜこの頃、その人のこと、その人たちのことを私はおもい出すのだろう。

旅先きの宿で、仕事中にふいに、知らぬ人にたずねられるということは気重いことだった。その人はそんなふうにして来た。小さな宿だから部屋に通ってもらうしかないのだが、私がまだ机の上を片づけ終らぬうちにもうその人は宿の人に案内されてきた。

「や、どうも」

と、ぶきっちょに聞える挨拶をしたその人は、どっちかと云えば小柄な身体に、ジャンパーをきて、丸顔の額が少しぬけあがっていた。
「いや、かまわんで下さい」
と、座ぶとんを敷居近くへ引いて、
「あなたがここにきていられるというのを、郵便局の知人に聞いたんですよ。それでちょっと御相談してみようかな、とおもうことがあってうかがったんですが、決して、あやしいものではありません。いや、あまり長い時間はお邪魔しません。実はこの頃から、どうしたものかと迷っているものだから、あなたに逢ったら何かいい知恵を借りられるかとおもってきたのですがね」
ふとんの上に膝をそろえて坐り、決して横柄という態度ではないが、そのものの言い方には、私を仲間うち、と見るような調子があり、一種の権高さも感じられないことはない。ジャンパーをきた姿は無造作で、仕事の途中からでもきたようだが、それがどういう仕事なのか私にはつかめない。相談ということの内容といい、見当がつかずにいると今度はいきなり、共産党の幹部の名を挙げて、「彼はこの頃どうしていますか」と聞いた。それはあくまでも対等な感じで云われた。
「さあ？　御存知なのですか」
と私が聞くと、

「以前あることでちょっと知っていましてね。あの人が私の郷里へ来たとき、うちで泊めたこともあるのです。実は昨年も上京して彼を訪ねましてね。彼に何とかしてくれ、と頼んだんですが、考えておこう、というようなことで、その後さっぱり何とも云ってこないのですよ。それで今日は、あなたに御相談に来たんですがね」

その人は、ちょっと前こごみになり、声をひそめた。

「これは秘密にして頂かぬと困るんだが、私は、ソヴェートへ行きたいとおもっているんですよ。何とか方法はないでしょうか。それをあなたに御相談にきたのです」

私は、奇妙な人に飛び込まれたと気がつき、はあ、と無責任に答えて、そりゃ今なら、何とか方法のないことでもなかろう、と、日ソ協会などのあることを云ったりした。私自身にいい方法などありはしないのは勿論だから、あたらずさわらずの返事にもなる。すると対手は、いや、と頭をかたむけて、

「私の言うのは、見物に行きたいというのではないのです。私はソヴェートに住みつきたいのです。ソヴェートで、私の力をおもう存分発揮してやりたい、という、そういう気持なのですよ。ソヴェートで私にいくらかの土地を与えてくれるなら、理想的な農業設計をして、素晴らしい収穫を挙げてみせる自信があるのです。それは単に私のためばかりではなく、ソヴェートにとっても必要ではないかとおもえるのです。現在のソ連では、農業政策は必ずしも成功していません。私が、かの地で力を発揮することができるなら、それはソ連にとっての利益ではな

いか。私のこの夢は、昨今のものではないのです。私は、静岡の人間ですが、ソヴェートへ移住する日のことを考えて、そのときにそなえて、三年前からこの土地へ移ってきたのです。ここは、ソヴェートの気候にいちばん似ているのですよ。私はこの町から山の方へ登ったところに、土地を手に入れて、現在、酪農をやっています。妻と、中学二年の女の子がひとりいます。妻も子どもも、私の計画に賛成しています。私は、この希望のためにだけ現在を費やしていると云っていいでしょう」

このときは六月であった。宿からのぞむ山々は新緑であった。宿の狭い庭の楓なども薄みどりの柔かな葉をひろげている。が、冬は雪ふかく、きびしい寒気だと聞いている。ここの気候が、ソヴェートに似ているのかどうか、私には知り得ようはないが、温暖の地の静岡から、三年前にここに移ってきたのが、目的にそなえるため、と聞かされると、私は返事を閉ざされたようになって、無言でお茶をさした。

額ぎわの少しぬけあがっている丸い頭の感じに気易さがある。人の好いおじさんなどがこういう頭をしている。が、彼はまださっきから一度も微笑をしなかった。だから、どこかちぐはぐな感じがして、私はかすかに圧迫を感じ出していた。額ぎわはやや薄くなっているけれど、年齢はようやく四十歳を出たくらいだろうか。三年前から、ソヴェート移住にそなえて生活の場をすでに変えた、というのは、ある的確な重さで聞えた。

その人は、私が、はかばかしく答えないのを、どのようにか感じたらしかった。

「いや、あまり長くはおじゃましません。が、私が、こういうことを考えるようになったのも、何故か、ということがわかって頂けないと、突飛におもわれるでしょう。私はここへ来る前に、郷里の近くのS市で書店を出していたのです。左翼の本をたくさん売りましてね。読書会なども組織しましたが、そういうことで、客がみんな私の店へきてくれたのですね。町でいちばん収益を挙げたのが、私の店だったのですよ。そのことで、書店仲間が、私を憎みましてね。ええ、めんどうくさい、とおもってしまって、六年間苦闘をして成功したその店を手離したのです。実に、資本主義国の小ちゃな経営というのが厭になりましてね。真に憎むべきものを憎むことを知らず、仲間うちの争いになるのです。あわれなものです」

かぶりを振ってそう云う彼を見ていると、書店の主人であったというより、小さな村の気むずかしい村長とでもいうようなタイプを連想させる。彼は自分の書店が成功していたことに今でも自信があるらしい。その話をつづける表情にそれがあらわれていた。

「地方の本屋などというものは、仕入れのために東京まできて重い荷をかついで帰るようなこともするのですが、私の妻もよく働いてくれました。彼女も重い書籍をかついでよく歩いたものです。だから私は、妻にもむくいてやりたい、しかし日本にいては、彼女にむくいてやることができないのですよ。私の妻は、ひたすら私についてきてくれる実に従順な女なのですが、それだけに彼女のことを考えてやらねばならないのです。彼女はハルピンで育ちました。その点でいえば、ソ連でなくとも中国でもいいのです。彼女にとって故郷でもある中国へともおも

っています。とにかく日本では、私のおもうことがやれない。私は、力いっぱい自分の腕で労働がしたいのです。その労働が、直接、国家の利益に結びついている、そういうところで働きたいのです」

私は今度も合づちが打てず、自分の気持が焦らだたしくなるのを、一種のうしろめたさで押えていた。あるいはこの人は、左翼的な考えの持ち主だろう。何かのそういう組織で働いたこともあるのかもしれない。が、今聞く話の論理は、宙に浮いていた。宙に浮いた論理で目的を立て、三年前からこの雪の深いという町の山辺で、酪農をしているということが、もしそれが本当ならば、どういうことなのだろうか。

「酪農の今のお仕事は、うまくいっていませんの」

と、私は遠まわりしてたずねる。私は自分も、その人の顔を正面から見得ないようになっている。その人の答え方は昂然と聞えた。

「現在は、親子三人食べることは何とかなります。親に分けてもらったものもあります。自分で云うのはおかしいが、私の家は郷里では旧い家柄でもあり、資産家といわれる方でしょう。もしあの方面へゆかれることがあったら、私の姓名を聞いてみて下さい。土地のものならたいてい知っているでしょう」

自分の家柄のよさをいうとき、たいていの人が陥るようにこのときの彼の言方も単純に誇らしげに聞えた。彼のどこか権高な調子を、このとき私はなるほどとおもった。が、彼の生家で

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com